

日本語の末日聖典, 26年ぶりの改訂

—2013年英語版改訂を反映して—



左から、テラー訳の明治版『モルモン経』、佐藤訳の昭和版『モルモン経』『教義と聖約・高価なる真珠』、平成版の『モルモン書』と末日聖典合本

「日本語の末日聖典合本の更新版について発表できることをうれしく思います。」——この度、日本語版末日聖典の26年ぶりの改訂版がリリースされたことが、大管長会からの手紙(2021年11月11日付け)で日本各地の神権指導者に知らされた。インターネット上の電子版は即日公開されている。^{※1}

この改訂版には、大管長会と十二使徒定員会による様々な調整(2013年に英語版でリリースされた変更)が組み込まれている。ほとんどの調整は聖文研究のための脚注、教義と聖約の見出し、あるいは本文中の細かい誤字や意味の修正だという。印刷した改訂版末日聖典の発売時期については後に発表される。今回の改訂版発刊により、会員が現在使っている聖典を買い替えることは求められていない。

日本語末日聖典の歴史——明治版

末日聖典の日本語出版は1909年、アルマ・O・テラー訳『モルモン経』に始まった。

テラーは、1901年夏に横浜へ上陸し

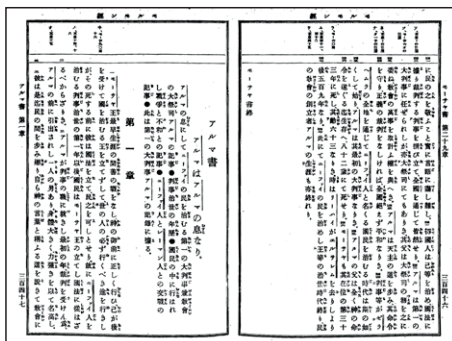
たヒーバー・J・グラントら最初の4人の宣教師のうち最年少(19歳)であり、若く柔軟な頭脳をもって日本語を習得した。

1905年、テラーは第3代日本伝道部会長の責任を受け、モルモン書の翻訳に着手する。初稿は18か月で完成し、さらに18か月にわたっていねいに推敲を重ねた。また複数の日本の知識人に翻訳文の批評を依頼する。ところが、テラーが口語体で進めていた翻訳を彼らは文語体に直してきた。ここでテラーは祈って熟考し、3年かけて翻訳した原稿をすべて文語体に書き直すという大きな決断を下す。その仕事は、夏目漱石がテラー

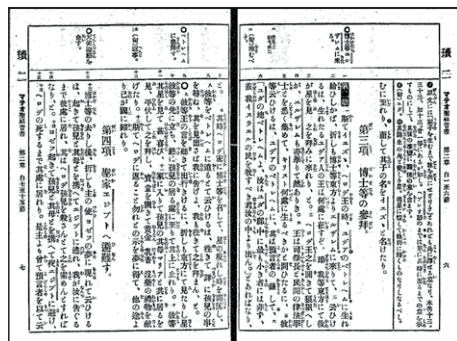
に紹介した新進気鋭の文学者・^{いくた ちうこう}生田長江に依頼された。原稿は詩人の^{かわい すいめい}河井醉若や学者の^{ひらいひろさう}平井廣五郎の批評に回され、慎重に検討が重ねられた。

やがて心血を注いだ翻訳は完成し、『モルモン経』と題して1909年(明治42年)10月に刊行、特別装丁本が皇室と政府高官に献上された。初版の『モルモン経』は、本文や脚注の活字の組み方が、同時期(1910年)に刊行されたエミール・ラゲ訳新約聖書(カトリック教会初の日本語訳聖書)とよく似ており、当時の標準的な聖文のレイアウトであったと思われる。

同じ時期に札幌では、宣教師のジョン・



テラー訳モルモン経(1909年)の組版



ラゲ訳新約聖書(1910年)の組版(国立国会図書館蔵)

※1—Scriptures.ChurchofJesusChrist.org または、福音ライブラリアプリにて



昭和版の翻訳者、佐藤龍猪兄弟(右)
賛美歌を翻訳した高木富五郎兄弟(左)と

R・ストーリーが、日本最初の教会書籍「末日聖徒耶穌基督教會略史」(1907年刊行)の翻訳を進めていた。この時点ですでに、定員会、ステーキ部、伝道部、聖餐式、神権、神会、大管長といった教会用語の日本語表現(造語)が定められ、今日まで受け継がれている。そうした用語を用いて1910年、甲府の会員であった白井襄次が任命されて「教義と聖約」の日本語訳がなされたものの、大管長会は時期尚早と判断し、出版には至らなかった。

格調高い文語体で書かれた初版『モルモン経』は、戦前の日本伝道部が閉鎖されてからも、ハワイの日本人伝道部で日系人の改宗に大いに活用された。

昭和版

戦後間もなく、進駐軍の兵士であったボイド・K・パッカーらによってバプテスマを受けた佐藤龍猪は、モルモン書の改訳を依頼される。戦後の伝道のためには、一般

の人に広く理解される聖文が必要であった。佐藤は、神の言葉や啓示は文語体で格調を保ち、それ以外は口語体にするという方針で翻訳した。この『モルモン経』は1957年(昭和32年)5月に刊行。同年12月には佐藤氏による『教義と聖約・高価なる真珠』(先の原則により、神の言葉として全編を文語体で記述した)も刊行される。こうして、日本語で初めて「末日聖典」(triple combination)が揃うこととなった。

平成版

時代は降って1990年代、再び末日聖典の改訳プロジェクトが始まり、改訂版『モルモン書』『教義と聖約』『高価なる真珠』が1995年(平成7年)に発刊される。このときの改訂で、末日聖典の全編が口語体となった。時代とともに文語体を読める人が少なくなる中、特に若い世代が理解に苦しんできた部分を分かりやすくし

た。その一方で、当時普及し始めたパソコンを用い、英語から日本語への用語対照が正確になされた。翻訳文においては、日本語として自然な文章にするため意識されていた部分を、たとえ流れが多少ごちなくなっても原文に忠実に翻訳し直すという方針が執られた。このとき、聖餐の祝福の言葉も改訂された。巻末には英語版と同様に『聖句ガイド』『聖書のジョセフ・スミス訳(抜粋)』その他の資料が付け加えられ、聖文研究に一層の便宜が図られた。

それから26年を経た令和の改訂版に寄せて、大管長会は手紙の締めくりにこう述べている。「会員が祈りの気持ちでその聖典から学び、教えるとき、証は強くなることでしょう。そして、日々の生活の中でさらなる導きを受けるようになることでしょう。」◆



2022年夏にfsyを開催予定

—2020年から待ち望まれた青少年の成長の機会—

2022年の夏、4年ぶりに対面でのfsy (for the strength of youth—若人の強さのために)開催が予定されている。2020年春にも計画されていたが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行のためオンライン開催となった。

今回は全国で3つのセッションが開かれる。8月8日(月)から13日(土)に東京北・札幌セッション(国立オリンピック記念青少年センター)と福岡・神戸セッション(長崎県立佐世保青少年の天地)

が、8月12日(金)から17日(水)に名古屋・東京南セッション(愛知県美浜自然の家)が準備されている。



2022年のテーマは「主に信頼する(Trust in the Lord)」。テーマ聖句は「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識に頼ってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」(箴言3:5-6)。2年におよぶ新型コロナ禍の下、学校生活や教会活動で様々な制限を受けてきた青少年にとって時節にかなったテーマである。参加申し込み期間は3月1日から5月31日まで。◆





「わたしは、決してあなたを離れず、
あなたを捨てない」※1

—— 46年前の求道者を神殿で結び固めて—— ひきしなのみ 引寺尚美姉妹 たかはし 岡山ステーキ高粱グループ

引寺尚美姉妹。
日本三名園の一つ、岡山後楽園にて

福音を求める夫妻

19 75年の冬、二人の姉妹宣教師が凍てつく東北の街で伝道していた。その一人は引寺尚美姉妹。幼い頃に両親が改宗し末日聖徒の家庭で育ち、19歳のときに日本で初めて開設されたセミナーで学び、伝道に出たいと強く望むようになる。そして21歳で専任宣教師となった。

温暖な中国地方で育った尚美姉妹に、東北の冬の寒さはこたえた。夕方、先輩同僚と「これで最後にしよう」と一軒の民家を訪れる。「こんばんは」と快く出迎えた30代くらいの女性に尚美姉妹たちは話しかけた。「わたしたちは神様の使いとして参りました。神様について、少しお話させていただきませんか？」すると女性は一度奥へ戻り、それから中へ入るよう促した。

二間続きの部屋の奥には男性があぐらをかいて座り、こちらを伺うように見ていた。男性は田中さん(仮名)といい、女性とは夫婦だという。ストーブの側で温まる

ようにすすめられた尚美姉妹と同僚は、自己紹介の後、ジョセフ・スミスの経験と祈りの方法について話した。田中さん夫妻はじっと耳を傾け、レッスンが終わると次の約束を作ってくれた。



21歳で伝道に出た頃の引寺尚美姉妹

数日後、尚美姉妹たちは再び夫妻の元へ赴いた。すると田中さんが畳に正座をして待っている。驚きながらも祈ってレッスンを始めると、田中さんが語り始めた。小さいときから乱暴者でけんかばかりしていたこと。中学生になると補導され、大人になると刑務所に入ったこと。暴力沙

汰で刑務所入りを繰り返すうち身内からも見放されてしまったが、幼なじみの奥さんだけは出所の際に迎えに来て頭を下げてくれたこと。それでも行いを改められず「バカをやった」こと——とつとつ 訥々と田中さんは語り、それから顔を輝かせた。

「こんな自分だから世間では相手にされない。なのに神様の使っていて人が俺のところに来てくれて本当にうれしいんだ。だからよ、どうか俺に神様のことを教えてくれねえか。」

純粹に福音を求める田中さんの姿は尚美姉妹の心を強く揺さぶった。「こういう人にこそ福音が必要なんだ。わたしは伝道に出てよかった!」

しかし同僚の判断は違った。レッスンを終えて玄関を出るやいなや、同僚は「この家にはもう来ません」と尚美姉妹に告げる。予想もしない展開に尚美姉妹は混乱した。「あんなに福音を求めている田中さんたちにどうして教えないんですか?」問い詰める尚美姉妹に同僚は答える。あのような経歴のある人を教会に連れて行くわけにはいかない、と。



伝道中の引尚美姉妹(中央)と同僚たち



教会に居ることになった経緯を思い出しながら語る尚美姉妹



尚美姉妹の集う高梁グループの集会は今井兄弟のご自宅の二階部分で行われている



37歳で教会を去った頃の尚美姉妹

納得のいかない尚美姉妹は何日も食いが下がったが、先輩同僚の判断は変わらなかった。「宣教師はみんな帰還するの。残って田中さんたちの面倒を見るのはこの地の会員よ。彼らが必ず困ると分かっていることをわたしはできない。」

そう言われ、尚美姉妹は引き下がるしかなかった。「その日から毎晩泣きました。わたしたちを歓迎してくれた田中さんたちの笑顔が何度も浮かび、神様のことを教えてほしいと真剣に願う彼らのことが忘れられませんでした。」

福音を求める人々に教えられないなら、誰のための伝道なのか。これが伝道の実態ならばもう働くことはできない。思い詰めた尚美姉妹は「伝道をやめて帰還したい」と伝道本部に申し出る。「伝道部長は面接をして、二つのことだけおっしゃいました。一つは最後まで伝道すること。もう一つは先輩に従うこと。田中さんの状況についてどこまで理解されていたのかは分からないし、分かっているであって言われたのかもしれない。それでもわたしは落胆しました。この教会には福音を教えてよい人と教えてはいけない人が存在することになる。これが神様の答えなの? と。」

面接の二日後、尚美姉妹は転任することになった。見送りの人々と別れて電車に乗った尚美姉妹はデッキに出て街並みを眺め、田中さん宅とおぼしき方角に向かって頭を下げた。「福音を教える約束を守れなくて、申し訳ありません……。涙がとめどなく頬を伝った。」

転任先では2人の日本人の姉妹と同僚になった。信仰深く朗らかな彼女たちと働く日々は尚美姉妹の心の慰めとなった。それでも時折、田中さん夫妻のことが頭をよぎり、一人部屋の片隅で涙した。福音は信じているけれど、弱さから過ちを

犯す人を全て受け入れないこの教会は本当に正しいと言えるのだろうか。迷いは消えなかった。

そしてあと1週間で任期を終える頃、再び尚美姉妹の心を揺るがす出来事が起こる。以前、改宗に関わった新会員の豊崎ご夫妻から、改宗して3か月で夫婦ともに支部会長・扶助協会の会長職に召されたとの手紙が届いたのである。通常では考えられない召しのあり方に尚美姉妹は戸惑った。帰還してからも彼らに手紙を送り、励まし続けた。豊崎ご夫妻は全力で奉仕したが、仕事と責任で疲弊した兄弟は教会を休むようになり、転勤を機に姉妹も集えなくなった。信仰深い兄弟姉妹が教会から離れた事実は、尚美姉妹にさらなる教会への失望と反発を抱かせた。「福音は真実。でも、この教会のあり方はおかしい!」と思いました。」

その後、結婚して子供にも恵まれるが、子供にこの教会が正しいと教えられないと思った尚美姉妹は、教会を去ることを選ぶ。「わたしの頭に罪がとどまってもいいから、バプテスマに関しては子供の自由意思で決めさせてください」と祈った。37歳のときだった。

「ほんとうの」教会を探して

それから尚美姉妹は様々な宗派の門を叩いた。仏教から他の宗派の教会までいろいろなところを覗いたが、腑に落ちるといことがないまま、時が流れる。

その後、幼い頃交流があった夫婦宣教師との再会をきっかけに再び教会に集った。3人の子供たちに福音を教え、長女はバプテスマを受けた。しかし会員生活は長く続かず、2011年の初めに親子で再び教会に行けなくなった。それぞれ教会で起こった出来事に疑問を抱き、悩んだ結果だったが、その根底には伝道中に抱いた疑問や理不尽な思いが解決されない尚美姉妹の迷いがあった。

しかし尚美姉妹の心は霊的なものを求めていた。そんなとき、たまたま誘われたある教派の集会に参加して聖書の教えを聞いた。それから1年間、ただ黙って一番後ろの席で集会に参加し続けた。そんな母親の姿を見た長女も一緒に集いはじめ、やがて彼女はこの教派の洗礼を受けたい、と言い始める。尚美姉妹は悩んだ。「聖書は学びたかったけれども、日の栄えの律法のない教会に改宗することに抵抗がありました。でも、娘を独りで改宗させるわけにはいきませんでした。」

その教派には改宗の際、前の教会とは一切のかかわりを断つという決まりがあった。2014年、覚悟を決めた尚美姉妹は当時住んでいたエリアにあった岡山西ワードに足を運び、ビショップの面接を経て退会届を提出した。

「わたしは彼女を見捨ててはいない」

尚美姉妹が別の教派に改宗して2年が経った2016年秋、当時岡山ステーキの

尚美姉妹が今井兄弟からの連絡を受けた携帯電話



会長を務めていた今井裕一兄弟は一通のメールを受け取る。地域七十人(当時)の徳沢清児長老からだ。 「数十年ぶりに再活発化された東北のご夫妻が、彼らを福音に導いた引寺姉妹を探しておられるとのことでした。」※2

尚美姉妹の連絡先を調べた今井兄弟は、ある日の早朝、まどろみの中で主の声を聞いた。

さわやかな秋晴れの午後、今井兄弟は尚美姉妹宅を訪ねた。退会したはずの教会からの訪問者に尚美姉妹は困惑するが、今井兄弟の「以前導いた東北の会員があなたの行方を捜しています」という言葉にはとつする。それは、夫婦で大きな責任を果たし、やがて教会を離れたあの豊崎ご夫妻だった。

今井兄弟に、どうして自分の住所が分かったのか尋ねたところ、返ってきた答えは「会員記録を見て参りました」。尚美姉妹は退会届を提出したが、何らかの事情でその後の手続きが行われないうまにならなっていた。

教会の手続きの不備に湧き上がる不信感を抑えながら、尚美姉妹はこれまでの経緯と教会に対する思いを手短かに伝えた。今井兄弟は深くうなずき、二つのことだけ、伝えさせてください、と言った。「わたしの耳元でイエス様がささやかれました、わたしは彼女のことを見捨てていないと。それから彼女のところへ行行って、先祖の歴史を調べるように伝えなさいとおっしゃったのです。」

「先祖の歴史」の言葉に尚美姉妹の胸はずぶいた。先祖の系図を熱心に調べていた父亡き後、新たに4人の親戚が亡くなっており、霊界にいる彼らのために儀式をしなければという思いが、別の教派に集っていてもいつも頭の片隅にあった。

その夜、尚美姉妹は自分を探してくれた東北の豊崎ご夫妻に電話をかけた。二人は驚き、喜んでくれたが、尚美姉妹の胸は痛んだ。「わたしはもう教会員ではないの。あなた方の宣教師でもなくなったんです。ごめんなさいね……。」

数日後、今の心境を詳しくお聞きしたいという今井兄弟と再度会う約束を作ったが、約束の日に今井兄弟は風邪を引き、会うことができなかつた。その後、日程の調整を行ったもののうまくいかない。まるで主から見放されているようで、失望した尚美姉妹は今井兄弟にメールで、退会届を再提出してくれるよう依頼する。

2017年4月の夜、今井兄弟はステーキ会長として尚美姉妹の会員登録抹消手続きを行った。タブレットで必要なページを開き、登録抹消ボタンをクリックした。その一瞬、今井兄弟の胸には以前受けた主の導きがよみがえっていた。「わたしは彼女を見捨てていない——」。

聖句が分からない!

今井兄弟が手続きを完了させた直後、尚美姉妹にはある異変が起こっていた。「聖句や霊的なお話を、全く理解できなくなつたんです。」

改宗した教派の集会に参加しても話されている内容を全く理解できない。「全

てが外国語みたいに聞こえて、聖書を読んでも全く心に入ってきませんでした。」

おかしいな、と思った尚美姉妹は原因に思い当たる。今井兄弟に手続きを頼んだ退会届。「あれが受理されたことで聖霊の賜物がなくなったんだ! と気が付いたんです。わたしが今まで聖句を理解して温かい気持ちになれていたのは、真理の御霊の働きだったんだ、と。」幼い時からずっと自分に力を与えてくれていた霊的な支えを失い、尚美姉妹は心身ともに弱ってしまう。「朝起きて食事だけ作って片付けてまた横になって……最低限のことしかできない抜け殻状態でした。」

御霊を失ったどん底の状態でも尚美姉妹は悟る。「いろいろと人の犯す間違いがあったとしても末日聖徒イエス・キリスト教会は正しい教会だったんだと、聖霊の賜物を失ってようやく分かったんです。聖霊の導きなしに生きられるはずもなく、そのときからどうやって教会に戻ろうかと考え始めました。」

度重なる要請

2018年9月、今井兄弟は徳沢長老からメールを受け取る。そこには10月の岡山ステーキ大会を管理することになったことに続けて、「ついにこの機会がやってきました」と書かれていた。

もしや尚美姉妹の再加入の話ではなからうか、という今井兄弟の懸念は的中する。直後に行われた電話での打ち合わせで、尚美姉妹への接触を打診されるも、今井兄弟は断つた。「新しい人生を尊重するためにも、退会届を出された方はこちらからコンタクトすべきでないという考えからでした。」しかし、徳沢長老には確信があったという。「わたしの父も13年教会を休んでいたのを、宣教師の助けがあつ

※2—「リアホナ」2018年4月号ローカルページL11参照。豊崎ご夫妻の再活発化と神殿参入までの軌跡が記事として掲載されている

て再び集うようになったんです。その経験は証となりました。ですから引寺姉妹も主の御心にかなうときに再び教会に集われるようになるだろうと感じていましたし、そのために主が岡山で大会を管理させていただきという予感があったんです。」

10月28日、岡山に到着した徳沢長老は尚美姉妹と連絡を取るよう再度提案したが、今井兄弟は再び断った。そしてステーク大会の土曜夜の部会が終わり、訪れたレストランで、徳沢長老は三度目の懇願をする。「電話を途中で切られたとしても、また引寺姉妹からどのようなことを言われたとしても構わないので、どうか電話をしていただけないでしょうか?」

今井兄弟はついに折れた。「長老にそこまでおっしゃられて拒むことはできません。それに彼女の携帯番号がまだわたしの電話帳には残っていたんです。」退会して二度と連絡を取らない会員の連絡先は速やかに消去している。しかし退会の際、特別な印象があった尚美姉妹の連絡先は消去する気になれなかった。今井兄弟はレストランの片隅で、震える思いで携帯を手に取り、尚美姉妹の電話番号を呼び出した。

そのとき、尚美姉妹は自宅駐車場に停めた車の中で思索していた。「どうやって教会に帰ろうか、退会届を出して、今井兄弟にも、もういいですって何度も言ってしまったし……。」そう思いあぐねていたとき携帯が鳴る。光を放つ液晶画面に表示されたのは「今井裕一兄弟」の文字だった。「神様ありがとうございます! って電話に出ました。」

「あの……今井でございますが……。」耳に押し当てた携帯から響く恐縮した声に尚美姉妹は語りかける。——「今井兄弟、わたしが今どんなに喜んでるか、お分かりになりますか?!」



尚美姉妹のバプテスマ会にて
左下はバプテスマを施した大垣聖也兄弟。尚美姉妹の両側にいるのは
今井会長の妹さんたちで大杉雅子姉妹、宮本真理子さん



聖霊の導きなしには生きられない

喜びあふれるその電話から一か月後、尚美姉妹は長女とともに招かれて高梁市にある今井兄弟の自宅を訪れた。親子の話に今井兄弟はじっくりと耳を傾け、最後にモルモン書を読むように勧めてくれた。

これまでどおり長女と別の教派組織の集会に集いながら、尚美姉妹はタブレットでモルモン書を読み始めた。教会へ戻るための道のりは遠く感じられたが、伝道中の同僚や当時の監督長老がメールや電話で励ましてくれた。

尚美姉妹には一つの願いがあった。できれば誰も自分のことを知らない小さな拠点で静かに信仰を取り戻したい。祈りの気持ちで福音の原則を学び直したい。そう祈っていた。高梁グループは数年前にできたばかりで、今井兄弟の自宅の1階を改装した礼拝堂にて30人程度が集会を行っていた。ここならば心静かに信仰を培える。そう感じた尚美姉妹は高梁グループに集い始める。「初めて高梁グ

ループの聖餐会や日曜学校に集ったとき霊の安らぎを感じました。幼いときに感じた平安……。ここにいてもいいんだと思いました。」

もう、聖霊の導きがない中では生きられない。尚美姉妹は毎週片道1時間半の距離を運転して高梁グループに通い続けた。8月末、尚美姉妹は別の教派組織を長女とともに正式に退会し、しばらくして宣教師からレッスンを受け始めた。同時に気になっていた親族の記録を調べ、4人の親族の儀式を、かつての伝道仲間や友人の助けによって完遂した。

2019年11月16日、引寺尚美姉妹は再び末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になるべくバプテスマを受けた。バプテスマ会には、高梁グループの会員たちや今井兄弟とその家族、かつての伝道中の同僚や監督長老も出席してくれた。

バプテスマを受けた直後の証の席で、尚美姉妹は教会に不信を抱きかけたとなった田中さん夫妻のことを初めて話した。なぜ自分が教会を離れ、そしてまた



江戸時代の面影を残す高梁市の街並み



田中さん夫妻のバプテスマの日、伝道時の同僚や監督長老も駆けつけてくれた
前列左は尚美姉妹と3人で働いた同僚の一人、主田富貴子姉妹
後列左は監督長老だった吉村信之兄弟



2019年12月
左から、岡山を訪問した徳沢清児長老
引寺姉妹、今井ご夫妻



監督長老だった吉村信之兄弟と、田中さん夫妻の結び固めの儀式の日に

戻ってくるようになったのか。発端となった田中さん夫妻の存在は出席者の心に深く刻まれたようだった。

田中さんの足跡を尋ねて

その後、集まった会員たちの間で田中さん夫妻の消息が話題になる。「来年の春には訪ねてみようと思っているけど……」という尚美姉妹の呟きを今井兄弟は聞き逃さなかった。「田中さん(仮名)の苗字は少し珍しいものだったんですが、今井会長は彼らが住んでいた市の電話帳を調べて同じ苗字のお宅をリストアップしてくださったんです。全部で20軒くらいあるそのリストを見たとき、今すぐ行かないや、と思いました。」

リストを手にして2日後、田中さん夫妻の消息が判明する。東北に住む教会員が、リストを手に入れた田中さん宅を見つけてくれたのである。「そのおうちにはお孫さん一家が住んでいらっちゃって、田中さんともう亡くなったと言われたそうです。」

それでも、尚美姉妹の気持ちは揺るが

なかった。「田中さんが亡くなっているなら、奥さんにお会いして儀式の許可をもらおうと思いました。」どうしても田中さんの身代わりの儀式を行いたい。その一心で尚美姉妹は岡山を発った。

2019年12月、尚美姉妹はかつて伝道した東北の街にいた。思い出深い田中さんの家の前に立ち、インターフォンを鳴らす。「恐れ入ります、どうしても、田中さんのご供養をしたくて伺いました」と頭を下げる尚美姉妹に、出てきた親戚の女性は快く家族の消息を教えてくれた。田中さんの奥さんも亡くなっていたが、息子さんの連絡先を聞き、連絡を取ることができた。

その日の夜、仕事を終えた田中さんの息子さんはホテルに尚美姉妹を訪ねてくれた。ホテルの支配人の厚意で営業を終えた静かなレストランの一角を借り、尚美姉妹は訪問の経緯を伝えた。タブレットで札幌神殿の写真を見せながら死者のための儀式の説明をした。「息子さんは真摯に耳を傾けてくださいました。物腰や

言葉に、優しく田中さんご夫妻の面影を感じました。」穏やかな空気の中、尚美姉妹が両親の儀式の許可を求めてサインをお願いすると、息子さんは快く応じてくれた。「不思議なことに、サインは必ずもらえると思いました。心に平安と静かな確信がありました。」

翌日、尚美姉妹は教えてもらった田中さんご夫妻のお墓に参り、儀式に必要な情報を全て入手した。田中さんは、5年早く亡くなった奥さんのために毎日欠かさず墓参りをし、美しい花を供えていたという。墓石の前で尚美姉妹は約束した。「必ず死者のためのバプテスマをしますからね。そして全ての儀式ができるように頑張ります。」

霊界に届く救いの儀式

2021年7月3日、約1年ぶりに儀式が再開された福岡神殿にて、田中さん夫妻の身代わりのバプテスマの儀式が行われた。儀式で身代わりを務めた今井兄弟は、バプテスマフォントに足を踏み入れた瞬間から田中さんをととても身近に感じたという。「なぜか思いがあふれて泣けてきて……自分の気持ちにその方の喜びが重なって、田中さんが今日のこの日を本当に喜んでおられることが伝わってきました。」

46年間ずっと心にかけてきた求道者・田中さんがついにバプテスマを受けるその瞬間を、尚美姉妹はフォントの傍らのいすに座って見守った。「やっ、彼らがどうしても聴きかかった神様の福音と贖いの祝福にあずかることができた、という安堵と、それを見届けさせてくださった主への感謝がありました。奥さんの身代わりの儀式のため、わたし自身もバプテスマを受け、深い平安を感じました。」

「神様はわたしの心を御存じでした」と

尚美姉妹はいう。「わたしが何に傷ついて教会を去ったか。でも、わたしがずっと気にかけてきた東北の豊崎ご夫妻は教会に戻り、そして今、田中さん夫妻も福音の道に入ることができた。もしあのとき田中さん夫妻が福音を受け入れても、世の偏見や差別に屈して教会を離れていたかもしれない。どんなに時が経っても主は福音を求める人々を決してお忘れにはならず、彼らにとって一番良い方法を備えて下



待ちに待った田中さん夫妻の儀式の日、福岡神殿の前で

さると確かに分かりました。全人類の罪を贖い、悔い改める全ての者に救いを得

させる主の御心は、必ず成るのです。」

2021年7月31日、福岡神殿にて田中さん夫妻の結び固めの儀式が完了した。今、尚美姉妹は愛する求道者と、そして迷っていた自分をも導いてくださった主の計らいに感謝しつつ、再び立ち戻った聖約の道で、深い喜びを味わいながら奉仕の業に邁進している。◆

インターネットでローカルページをお読みいただけます

jp.churchofjesuschrist.org

- 日本公式ウェブサイト>会員サポート
- >福音ライブラリー>教会機関誌
- >ローカルページ



今月のNews Headlines

● ニュースルームはこちら!

<https://news-jp.churchofjesuschrist.org>



● 総大会を視聴するアジア北地域 11月2日リリース

● 日本語の末日聖典、26年ぶりの改訂版がリリースされる 11月12日リリース

※上記リストは日本発信または日本に関連する記事のみです。海外発信記事(日本語)も数多く配信しています。

役員の変動

2021年10月22日から2021年11月22日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 千葉ステーク鎌ヶ谷ワード
ビショップ: 猪股 雄介
- 日本東京西ステーク
第一顧問: 伊藤 則明
第二顧問: 川島 弾
- 名古屋ステーク岐阜ワード
ビショップ: 後藤 伸一郎

- 日本名古屋東ステーク
会長: 杉本 浩彰
第一顧問: 野村 道生
第二顧問: 米田 健太
- 岡山ステーク岡山西ワード
ビショップ: 鶴峯 裕之

- 岡山ステーク福山支部
会長: 原田 秀吉
- 広島ステーク柳井ワード
ビショップ: 森岡 竜
- 広島ステーク呉支部
会長: 坪中 一成

皆様の情報をお寄せください

会員の皆様の身近な話題をご紹介します

◎『リアホナ』日本語版編集室

〒106-0047 東京都港区南麻布 5-8-8

TEL. 03-4545-3100 (代)

電子メール:

JPNLiahona@churchofjesuschrist.org

◎国際機関誌『リアホナ』のお届け、その他商品に関するお問い合わせ——

教会配送センター

TEL. 03-5668-3391

FAX. 03-5668-3392